

### マラルメとセザンヌ : 詩論と絵画論(1)

安藤, 俊次

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Liberal Arts, Hosei University / 法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

99

(開始ページ / Start Page)

217

(終了ページ / End Page)

225

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003587>

## マラルメとセザンヌ —詩論と絵画論—(1)

安藤俊次

詩と絵画、詩人と画家、詩論と絵画論、このそれぞれ対応する二項の間になんか関係があるのか、論ずるといって、果たしてそんなことがそもそも可能なのか。或る程度限定を設けてならという前提に立つならいざ知らず、また極めて一般的な印象批評に止まるのを避けようとするなら、まず無謀な試みであろう。これが文学と美術、文学者と美術家、文学論と美術論ともなれば、なおさらのことで、さらに音楽、演劇（舞台芸術としての）等のジャンルを設定するとなると総合的芸術論として扱うしかあり得まい。ジャンルそれ自体は、根底云々を問わなければ、比較対照できるものでは飽くまでもないのだろう。

19世紀後半は、その諸ジャンルが融合するようにも見え、一方でまるでそれぞれが他のジャンルのエッセンスを取り入れつつも、純粹詩、純粹絵画、純粹音楽等々、の方向へ向かうようにも見えた時期であった。「純粹詩」、「純粹絵画」という語の当否はさておき、どのようなコンテキストでそのようなことが起こったのか。この小論では、詩と絵画、両ジャンルから、マラルメとセザンヌという同時期「領袖」、「巨匠」といわれた詩人、画家を取り上げ、その間の事情に一瞥を与えようとするものである。因みに、ステファヌ（本名エティエンヌ）・マラルメ Stéphane (Étienne) Mallarmé, 1842年パリ生まれ（一家の「発祥の地はブルゴーニュであり、またロレーヌであり、オランダでさえある」<sup>(1)</sup>）、1898年没、ポール・セザンヌ Paul Cézanne, 1839年エクサン・プロヴァンス生まれ（一家の祖先はもと、イタリア、コチャ・アルプスの町セザンヌ Cézanne, 後のチェザーナ Cesana の出<sup>(2)</sup>）、1906年没。

幸い両者共に『書簡集』<sup>(3)</sup>が刊行されており、また評伝<sup>(4)</sup>にも事欠かない。これらを丹念に辿ればそれぞれの交友関係はかなりの程度まで自ずと明らかになるだろう。取り敢えず両者の『書簡集』に現れる人名からそれぞれの交友圏を探ってみれば、双方の重なる部分も判然とする。

マラルメの場合、交友のあった画家として挙げられるのは、先ずマネ

Édouard Manet, モネ Claude Monet, ドガ Edgar Degas, ルドン Odilon Redon, ベルト・モリゾ Berthe Morizot, ルノワール Auguste Renoir, ゴーギャン Paul Gauguin, ロダン Auguste Rodin, ホイッスラー James A. M. Whistler, メアリー・カサット Mary Cassatt, ドニ Maurice Denis, それに多分フェリシアン・ロップス Félicien Rops, あるいは、ピサロ Camille Pissarro, ゴッホ Vincent van Gogh さえ加えることができよう。一方、セザンヌと交友のあった文学者は、エックスのブルボン中学校以来の親友 (1886 年に破綻か) ソラ Émile Zola (1 歳年少, 父親はイタリア人), そのメダンの館に集うアレクシス Paul Alexis, ユイスマンス J.-K. Huysmans, モーパッサン Guy de Maupassant, セアール Henri Céard, パリのカフェやニナ・ド・ヴィヤール Nina de Villard のサロンなどで識り合ったらしいディエルクス Léon Dierx, ヴィリエ・ド・リラダン J.-M.-M.-P.-A. Villiers de L'Isle-Adam, ヴェルレーヌ Paul Verlaine, ゴンクール Edmond de Goncourt 等々。詩人は文学者と、画家は画家とかなりな程度知り合いであるとすれば、更には、マラルメが作家兼美術評論家デュレ Théodore Duret, 同デュランティ L.-É.-Edmond Duranty, 同ジェフロア Gustave Geffroy, 同ミルボー Octave Mirbeau を、セザンヌがヴァレリー Paul Valéry, ジッド André Gide を識っていたとすればなおのこと、双方の交友範囲は大きく重なることになる。確かに、今挙げた人名はほとんどが互いに親しい友人同士でもあった。特に、ニナ・ド・ヴィヤールのサロンで二人が出会った可能性がないわけではない。マラルメは、1862 年 5 月フォンテーヌブローの森へピクニックに行った際、ニナ (当時は、ニナ・ガイヤール N. Gaillard) とも同行しているし、その後ニナが 70 年代にサロンを開いてからも時折出入りしていた。

しかし、現存する書簡の中でマラルメがセザンヌの名を挙げているのは僅か二度、セザンヌに至っては一度もマラルメの名を挙げてはいない。画家が同時代の詩人にさほど関心を示さないのは致し方ないとしても (ボードレールは勿論、フローベール、バルザックへの言及には強い関心が見て取れるが)、マラルメがセザンヌにほとんど無関心であるように見えるのは何故だろうか。

セザンヌの名が見えるマラルメの書簡はいずれも 1898 年 5 月付けで、同時期に画商ヴォラール Ambroise Vallard のギャラリーでルドンの展覧会と重なって催されているセザンヌの展覧会についての簡単な記述があるだけであ

る。発信地はヴァルヴァンであるから、詩人はこの展示を見ることなく、9月には同地で世を去ることになる。ヴォラルルのギャラリーでのセザンヌ展は、1895年<sup>(5)</sup> 11月にも開催されているが、これに関する言及はマラルメの『書簡集』には見当たらない。

二人が、あるいはニナ・ド・ヴィヤールのサロンで、あるいはカフェ・ゲルボワ、カフェ・ド・ラ・ヌーヴェラテーヌで、あるいはパリやメダンのゾラの家で、マネの家<sup>(6)</sup>で、実際に顔を合わせる機会があったとすれば、互いに関心を抱きあう可能性は極めて高いと考えられる。マラルメはトゥールノン時代(1863-66)アヴィニョンの南仏方言詩派(フェリブリージュ)オーバネル Théodore Aubanel, ミストラル Frédéric Mistral 等と交友があり、1867-71年はそのアヴィニョンに赴任していて、南仏には馴染みが深い。南仏訛り丸出しで奇行の逸話<sup>(7)</sup>に事欠かぬセザンヌが他の人々同様、マラルメにも良くも悪くも何等かの印象を与えたことは十分考えられるのである。

そうした状況の下、先輩詩人ボードレールから、詩そのもの、詩論、詩人論は勿論のこと、美術批評の伝統をも受け継いでいるはずのマラルメにして、この関心の低さは不可解ですらある。エックスからパリに出た成功者ゾラも、積極的に二人を引き合わせる労を取った形跡がない。マラルメはマネとの親交を益々深めていき、所謂印象派の画家達の画業に共感を示す。『作家・詩人・画家の全身像』*Quelques Médailles et Portraits en pied*<sup>(8)</sup>で取り上げている画家は、ホイッスラー、マネ、ベルト・モリゾの3人。他に『アンリ・ルニョー1周年』*L'Anniversaire de la mort d'Henri Regnault*<sup>(9)</sup>。マネに関しては『全身像』以外に『1874年絵画審査委員会とマネ氏』*Le Jury de Peinture pour 1874 et M. Manet*<sup>(10)</sup>、全集には収録されていないが、後に発見され、重要なマネ論、印象派絵画論と看做される『印象派の画家達とエドゥワール・マネ』(ロンドンの雑誌〈月刊美術評論〉*Art Monthly Review*に発表されただけで、従って英訳のみ現存) *The Impressionists and Edouard Manet*<sup>(11)</sup>がある。

先輩ボードレールの美術に関する精力的な仕事<sup>(12)</sup>と比べれば、量で明らかに劣り、対象は印象派画家に限られている。『1874年絵画審査委員会とマネ氏』は、マネがこの年官展(サロン)に出品した3点の絵画のうち『鉄道』*Le Chemin de fer*だけを選ばせ、他の2点『オペラ座の仮面舞踏会』*Le Bal de l'Opéra*と『チュイルリー公園の子供達』*Les Hirondelles*を拒否し

たことに対する熱烈なマネ擁護論である。2年後の『印象派の画家達とエドゥワール・マネ』では、1860年代ロマン派に代わってクールベのレアリスムによって絵画が刷新されたことから始め、マネの登場、ボードレール、ゾラによる支持、マネの芸術の分析、とりわけその『洗濯女』*Le Linge*の特色＝「戸外 (open air = plein air) の理論」、光の美学の解明に力が注がれ、他の個々の画家、モネ、シスレー Alfred Sisley、ピサロ、ドガ、ベルト・モリゾ、ルノワール、ホイッスラー、エヴァ・ゴンザレス Éva Gonzalès 等の名が挙げられてる。中に一箇所、こういう記述がある。

こうした様々な試みと努力 (恐れを知らぬド・セザンヌ氏 de Césane は、時にこれらを更に一層推し進めることがある) はすべて、「印象主義」という共通の帯で一つに結ばれている。<sup>(13)</sup>

この「恐れを知らぬド・セザンヌ氏 the intrepid M. de Césane」が、セザンヌを指しているかどうかは明確ではない。マラルメ自身、この英語訳には所々誤訳があると語っている<sup>(14)</sup>が、印象派の試みを「更に一層推し進める」「恐れを知らぬド・セザンヌ氏」は、ポール・セザンヌその人である可能性が高い。とすれば、現在のところこの記述がセザンヌの絵画に対するマラルメの唯一の評価となろうし、直接の親交はなかったにしても、マラルメはセザンヌの絵画を当然目にしていただけになる。二人の直接の親交を妨げたのは、無作法、奇行、非社交性 (飽くまで紳士であったマネ<sup>(15)</sup>とは対象的) 等々、専らセザンヌの方に原因があったのかもしれないが、この僅か数語の記述からは、セザンヌの絵画に対するマラルメの多少の戸惑いさえ感じられないか。自ら携わる詩の分野では、あれほどの冒険を試み、「更に一層推し進め」ようにしたマラルメであるのに。あるいは、ユイスマンスの次のようなセザンヌ評に同意していたのか。

要するに、印象主義運動に故マネより寄与することの大きかった啓示者としての色彩画家、視覚は苛立つ統覚となり、新たなる芸術の前兆を発見した網膜を病む芸術家、そう要約できるように思われる、この余りにも忘れられすぎた画家、セザンヌ氏は。(『画家達の肖像』*Certains*<sup>(16)</sup>)

『印象派の画家達とエドゥワール・マネ』が、マネを筆頭に印象派の絵画論として傑出していること、またマラルメの詩論と通底し合う部分のあること（従って、マネを始め当の画家達にさえ充分理解できたかどうか）、等についてはここでは触れない。ただ、セザンヌが最も影響を受けたと言われるピサロに対する評だけ引用しておく。

ピサロ（著者注：英訳者ジョージ・T・ロビンソンは、Pizzaro と常に誤記している—「M. de Césane = Cézanne<sup>(17)</sup>」の傍証となるか）は、（…）夏の森の分厚い陰や緑の大地を好み、堅固さというものを恐れない。時として堅固さは、人気を、陽光に満たされた光り輝く霽のように目に見えるものとするのに役立つ。<sup>(18)</sup>

マラルメの側から見たセザンヌに関する直接の手掛かりは、もう一つ『作家・詩人・画家の全身像』のうち『ベルト・モリゾ』（1896年発表）に一箇所「印象主義」の注として「既に名を挙げた画家以外に、メアリー・カサット、それにセザンヌ、ピサロ、ルアール Henri Rouart、シスレー、カイユボット Gustave Caillebotte、ギョーマン Armand Guillaumin<sup>(19)</sup>」の記述が見られるのみである。

総じてマラルメの絵画論、画家論の特色として、

- 1) 同時代の中でも親しく交際した画家を取り上げていること、従って印象派に集中すること
- 2) 画家論は、寧ろマラルメ特有の表現によって、散文詩による「肖像画」の如く見えること（『作家・詩人・画家の全身像』参照）
- 3) 絵画論は、印象派の特色を捉えるに止まらず、マラルメの詩論と二重写しになっていること（これについては、何人かの論評がある<sup>(20)</sup>）（『1874年絵画審査委員会とマネ氏』、『印象派の画家達とマネ』参照）

以上、3点が挙げられよう。

ボードレールの伝統を受け継いだとはいえ、美術に対する関り方は、マラルメではかなり特殊と言えよう。ボードレールが批評したサロンが、新しい絵画を受け入れなくて、枯渇し、寧ろマラルメにとっては批判の対象となった以上、ディドロ、ボードレールと続いた「サロン評」は、その基盤を失っていた。

いずれにせよ、76年頃から20年間ほどマラルメがセザンヌに関心を持って

いたと言える痕跡はない。

なお、マラルメと特に親交のあった画家を整理するなら、マネ (1832-83) を別格として、ホイッスラー (1834-1903)、ドガ (1834-1917)、モネ (1840-1920)、ベルト・モリゾ (1841-95)、ルノワール (1841-1919)、ヴイヤール (1868-1940)、それにルドン (1840-1916)、マラルメの肖像を描いているのがマネ、ホイッスラー、ゴーギャン (1848-1903)、ルノワール、それにムンク Edvard Munch (1863-1944)、詩又は訳詩に挿絵を描いたのがマネ (ポー『大鴉』 *Le Corbeau*, 1875 の訳詩、豪華単行本。同じく単行本『半獣神の午後』 *L'APRES-MIDI D'UN FAUNE*, 1876)、ルノワールは『ページュ』 *Pages*, 1891 の扉絵を描き、ドガ、モリゾ、モネ (各人が1編の散文詩を担当)、それにルドン<sup>(21)</sup> (『骰子一擲』 *Un Coup de Dés : jamais n'abolira le Hasard*, 1914. 死後刊行、挿絵なし)、ヴイヤール (『エロディヤード』 *Hérodias*, 未刊) が挿絵を依頼されているが、完成に至っていない。更に、古くからの友人で、前述のフォンテーヌブローへのピクニックにも同行したアンリ・ルニョー (1841-71, 前出『アンリ・ルニョーの一周忌』参照) を加えなければならないが、この、ドラクロワの礼賛者で普仏戦争の犠牲となった画家が、マラルメの絵画観にどれほどの影響を与えたかは、詳らかでない。いずれにせよ、パリに出てからのマラルメがかなり社交的で、有名な「火曜会」など、周囲に多くの人が集まった中に、セザンヌの姿は見出し難い。

セザンヌは孤立していたのか。多分。パリで先ず頼みとするゾラ、そのゾラはマネを介して (マネはゾラの肖像も描いている) マラルメとも知り合い、自分の世界を広げている。そこに割り込む余地も気持ちもなかったようだ。しかし、この間、セザンヌは、ルノワール、ゴーギャン、画材商タンギー Julien Tanguy, dit le père, 画商ヴォラルル、ドニ、ベルナルル Émile Bernard, ヴイヤール等々の称賛の的となっていく。平行して、ベルナルル、リヴィエール Georges Rivière, ジェフロワ Gustave Geffroy, ルコント Georges Lecomte, フェネオン Félix Fénéon といった批評家達がセザンヌの画業を評価する記事を書き<sup>(22)</sup>、遅れ馳せながらも世に認められ始める。

こうした中、ゾラは恐らくはその小説『作品』 *L'Œuvre*, 1886 が原因だったのだろう、セザンヌとの永年の友情関係が断たれることになる。メダンの館に集まる人々のセザンヌ評は、前に引いたユイスマンスの言葉とさほどかけ離れたものではなかっただろう。既にユイスマンスは、1883 (2?) 年『現代芸

術』*L'Art Moderne* を出版、しかしそこではセザンヌを全く取り上げていない。マネはマネで、元々セザンヌに厳しかった<sup>(23)</sup>。ゾラ、マネに近かったマラルメもセザンヌに対してはその評価に差があったとは思われない。今までの資料で見る限り、時々突出はするが印象派の内の一人、としか見ていなかったのではないか。

セザンヌの方は、マラルメと接触する機会もほとんど(全く)なく、その著作に触れることもなかったのだろう。詩は、青年時代から親しんできたラテン詩人、アブレイウス、ウェルギリウス、それにヴィニー、ヴェルレーヌ、そして何とんでもボードレール、こうした詩人の詩句を暗誦することで充分だったのかもしれない<sup>(24)</sup>。マラルメもまた、初期の苦難、無理解を徐々に克服し、その死の1年後(1899年)には、初の詩集 *Les Poésies de S. Mallarmé, A Bruxelles chez Edmond Deman* が出版され、この難解なる詩人への世の評価も高まりつつあったのに、エックスの画家は依然として無関心であったように見える。

以上、マラルメとセザンヌを取り巻く環境、両者の互いの評価に就いて見てきたわけだが、今後は、こうした状況の中、あるいはこうした状況にも拘らず、マラルメの絵画論、詩論と、セザンヌの絵画論とに共通する部分がいかに多いか、その底にあるのは何か、またその実作との関係を見ていきたい。

(続く)

#### 〈註〉

- (1) MALLARMÉ, Stéphane: *Œuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1945, p.662.
- (2) PERRUCHOT, Henri: *La Vie de Cézanne*, Hachette, 1958, p.12 et note.
- (3) MALLARMÉ, Stéphane: *Correspondance* I-XI, Gallimard, 1959-85. *Documens Stéphane Mallarmé* I-VII, présentés par Carl Paul Barbier Librairie Nizet, 1968-80. 『マラルメ全集Ⅳ書簡Ⅰ』阿部良雄他訳、筑摩書房、1991、他。  
CÉZANNE, Paul: *Corresponndance*, Editions Grasset et Fasquelle, 1978. 『セザンヌの手紙』池上忠治訳、筑摩書房、1967、他。
- (4) MONDOR, Henri: *Vie de Mallarmé*, Gallimard, 1941. *Mallarmé lycéen*, Gallimard, 1954. 菅野昭正『ステファヌ・マラルメ』、中央公論社、1985。  
PERRUCHOT, Henri: *op. cit.* (『セザンヌ』矢内原伊作訳、みすず書房、1963) 他、多数。



- (5) 1995年-1996年、パリのグラン・パレを皮切りに、ロンドンのテイト・ギャラリー、フィラデルフィア美術館と回った『セザンヌ展』は、170点以上を展示した過去(多分、今後も)最大のセザンヌ展であったが、1895年の展覧会から百年目というのが主催者側の弁である。
- (6) MALLARM, S.: *Correspondance II*, p.51 note に、「L. デフー L. Def-foux によれば、マラルメとゾラが始めて会ったのは、サン・ペテルスブルグ街のマネの家であった。マネはゾラの肖像を1868年に、マラルメの肖像を1876年に描いている」という記述がある。
- (7) セザンヌの奇矯な振る舞いの例は、枚挙に暇がないが、その内の一つだけ挙げておく。「(カフェ・ゲルボワで)彼はダニユープの百姓の真似をどぎつくやって見せた。そこへ入って来ながら、上着の胸を開き、『頑丈な腰を動かして、』ズボンを引き上げ、太い真赤なバンドを、これみよがしに締めなおした。そして人々に握手した。だがマネの前まで来ると、帽子をとり、鼻声で言った。『マネ先生には手を出しますまい。ここ一週間、手を洗っておりませんので』と言った。(矢内原伊作訳) PERRUCHOT, Henri: *op. cit.* pp.150-1, 訳は、前掲書 pp.150-51. 人付き合いの悪さ、臆病、感情の起伏の激しさ等々は、年齢と共にその度を増していったようだ。
- (8) MALLARMÉ, Stéphane: *Œuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1945, pp.531-7.
- (9) *ibid.*, pp.687-8.
- (10) *ibid.*, pp.695-700.
- (11) *Documents Stéphane Mallarmé I*, pp.66-86.
- (12) BAUDELAIRE, Charles: *Critique Artistique, Œuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1961, pp.813-1201. なかでも『サロン評(1846年, 1859年)』*Salon de 1846, 1859* 『ドラクロワの生涯と作品』*L'œuvre et la vie de Delacroix*, 1863 『現代生活の画家』*Le Peintre de la vie moderne*, 1863 が与えた影響は大きい。
- (13) *op. cit.*, p.83.
- (14) Lettre à Arthur O'Shaughnessy, 19 octobre 1876. *Correspondance II*, pp.129-30.
- (15) 「優雅な伊達男、中背で、髪はブロンド、華奢な唇をした上品な洒落た紳士で、外出の時は必ずシルクハットをかぶり、ステッキを持ち、手袋をはめるという(……)この大ブルジョワの息子、社交界の人、態度物腰は、上品で洗練され、生粋のバリジャン」(矢内原伊作訳) PERRUCHOT, Henri: *op. cit.* pp.136, 訳は、前掲書 pp.135-6.
- (16) HUYSMANS, J.-K.: *L'Art moderne, Certains*, Union Générale d'Éditions, 1973, p271.
- (17) 前述のように、セザンヌ一族の発祥の地が、イタリア語化されて、Cesana となっているところからすると、益々この可能性は高い。
- (18) *op. cit.*, p.80.
- (19) MALLARMÉ, Stéphane: *Œuvres Complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1945, p.535.
- (20) 柏倉康夫『パリの詩・マネとマラルメ』筑摩書房, 1982。  
菅野昭正, 前掲書。

拙稿「マラルメのトリプティカ」法政大学教養部「紀要」第 85 号・外国語学・外国文学編, 1993, 他。

- (21) 「ルドンとマラルメ」については、窪田般彌『フランス文学夜話』青土社, 1981 のこの項参照。
- (22) ユリイカ 1996 年 9 月号「環って来たセザンヌ」〈ポール・セザンヌ年譜〉参照。
- (23) 『俺はセザンヌとは絶対かかわりあいになりたくないんだ。』(……) 彼にとって、セザンヌは、『こてで描く左官』にすぎない, というのだ。(矢内原伊作訳) PERRUCHOT, Henri: *op. cit.* pp.197, 訳は, 前掲書 pp.198。
- (24) 松嶋保和『セザンヌと読む』勁草書房, 1994 参照。